

## 2 調査研究の経過

### 1) 調査研究の課題

近年の古文書学は、原本を直接対象とした研究が著しく進展し、単なる文書様式の検討にとどまらず、その形態・機能・伝来・分布にわたって多くの成果を挙げている。しかしながら、文書の料紙の研究についてはほとんど無いといってよい状況にあり、研究があったとしても戦前の古文書学の水準を超えるものとはなっていないように思われる。

こうした研究状況の中で鋭意ひとり気を吐いているのは、上島有氏だけと言ってよいであろう。氏は、例えば、「古文書の料紙について（一）」（『古文書研究』27号）・「公家文書の料紙の使い方」（『古文書研究』28号）・「室町時代の武家文書の料紙の使い方（上）・（下）」（『古文書研究』29・30号）等において、古文書の料紙の折り方・封式・紙質について自身の研究の到達点を披瀝されている。これらの研究のうち、文書料紙の紙質については、室町時代のそれは奉書Ⅰ・奉書Ⅱ・奉書Ⅲ・檀紙・美濃紙の5つに分類できるとし、それぞれの紙が特定の様式の文書とか特定の用途の文書の料紙に使用されると説かれている。氏はその後さらに論考を重ねられ、近年「中世文書の料紙の種類」（『中世古文書の世界』）において再び中世文書の料紙の種類として、さきの5つの分類に宿紙・斐紙・その他の雑紙を加えて、8類型となるという新説を提唱された。これは、初めから性格のはっきりしている宿紙・斐紙と、反対に性格を一律に論じられない雑多な紙を一括した雑紙という概念とを、新たに加えたものである。したがって、新説は基本的には5分類の旧説と変ったわけではなく、それを少しく補強したものと言うことができる。これら上島氏の一連の研究は、この方面における戦後の研究の先鞭をつけたものと評価してよいであろう。

しかし、氏の数多の研究にもかかわらず、成果という点からみて戦前を超える水準に達したかという点、これを認めるのになお躊躇を感じざるをえない。何故ならば、上島氏の研究成果とその方法に対して、次のような幾つかの疑問を覚えるからである。まず、その研究成果として出された中世文書の料紙の8つの分類についてであるが、近世に主流となると考えられる「奉書紙」の概念を室町期の中心的料紙概念としていること、室町殿の御判御教書の料紙に想定している「檀紙」概念は果たして正しいかどうか疑問であること、いまだ産地名の域をでない「美濃紙」を1つの紙種としてとらえ一方で、既にこの期の料紙概念として定着していたと考えられる「杉原紙」を料紙の種類に数えていないこと、等々である。これは、氏が歴史的な紙の名称を無視して、近世以降の紙に対する感覚で論議されているからであるが、このような議論の仕方では、氏の折角の研究成果が逆に学界を混乱させる要因となってしまう恐れなしとしないのである。

次に、研究の方法であるが、氏は客観的な計測データとしては紙の縦横の寸法と厚さを示すに過ぎず、しかも公家文書の院宣・綸旨と武家文書の御判御教書が主たる調査研究の対象であり、その計測事例の数も十分なものとは言えない。さらに紙質の判定についても、繊維の光学的観察や化学的分析といった客観的科学的な判定方法を用いているとはいえるものではなく、視覚的経験的な判断にとどまっていると言わざるをえない。したがって、我々は氏の研究は戦後がおける1つの先駆的研究として認め、かつそれに謙虚に学ぶべものであると思いつつも、残念ながら、氏の研究はいまだ個人的な研究の域をでるものではなく、氏の提案された料紙の分類基準も学界一般に通用するものとしては問題が多い、と断ぜざるをえないのである。

このような研究状況にあって、我々はまず料紙研究の方法を明確に見定めなければならない。そのため、文献資料にみえる古代中世の紙の歴史的名称である檀紙・杉原紙・引合・鳥の子・間似合・奉書紙がどのような紙であり、現存する文書料紙の遺品のどれを指すものなのか、をつきとめることから始めなければならない。そして、これらの紙がどのような系譜をたどって生産され始め、その全盛期は何時だったのか、各時代毎のこれらの料紙の使い分けはどのようなようだったのか、をも明らかにしなければならないだろう。しかし、このようなことは、残念ながらそれほど簡単なことではない。現存の文献には、これらの紙の種類を容易に判別する見分け方がどこにも示されていないからである。

このための研究方法としては、まず文献資料における紙の名称の所見についてその時代的分布を整理し、これらの歴史的な盛衰を明らかにし、かつこれらの紙がどのような文書に使用されたかを確認する作業から始める必要があるであろう。文献上からその料紙の名称がわかる文書の現物そのものが現存していれば問題がないであろうが、そのような好都合な資料はそうあるものではないであろう。しかし、現存はしていなくとも、その種の料紙がある種の文書に多く使用されるという相関性が確認できるとするならば、現存文書の統計的な調査である程度その名称の見当をつけることができるのではあるまいか。このようにして現存文書の料紙の歴史的名称が特定できるならば、その料紙の物理的な計測・繊維の光学的観察および化学的分析といった客観的科学的な方法で動員して検討を加え、その紙の特質を明らかにすることができる。そして、その特質が明らかになれば、その特質は我々の視覚や触覚等にはどのように感ぜられるのか、あるいは簡単な計量や試験によって判定できるのかどうか、を示すことができるであろう。こうした手続きを経た上であれば、文書料紙について、誰でもができる簡単な計測ないしは視覚的な判断によって、その紙種を識別できる客観的な判断基準を提案できるのではあるまいか。それはおそらく、紙の歴史的名称と現存文書料紙との比定が正確でさえあれば、必ずや可能なことと考えられる。何故ならその時代の人々の誰でもがその紙の種類を視覚的・感触的に容易に見分けていたからである。

我々は以上のような問題関心からこの課題に取んできたわけであるが、その計画・方法

を簡単に述べれば、次のようにまとめることができるであろう。

- (1) 文献資料調査
- (2) 文書料紙原本調査
- (3) 文書料紙の光学的調査
- (4) 文書料紙の化学的分析
- (5) データのコンピュータ入力及び分析

(1)～(4)については、上に述べたことから明らかであるから改めて説明を要しないであろう。(5)は上の4項目の調査データをコンピュータに入力し、研究メンバーが分析を行うための素材を提供せんとするものである。これらの5項目については、改めて、次節以下に詳細に述べることとする。

本研究の直接的目的は、上述のように古代中世人の紙の種類の見分け方を我々が会得することと言い換えてもよいが、そのことが判れば文書の料紙のおおよその生産年代さらに生産地までわかってくるであろう。紙の製造年と文書の料紙となった年紀がそれほど懸け離れたものでないとするならば、文書の書かれた大体の年代も見当がつくこととなる。文書の中には、紀年のない文書も少なくないし、案文や写本においては、正本の日付を写したとしても書写した日付は書かないのが普通である。料紙の製作年代の判定は、このような無年号文書の作成年代や案文・写しの書写年代の推定にも役立つであろうし、延いては、文書の真贋判定にも利用できると思われるのである。このように、本研究は単なる文書料紙の種類の見分け方を解明するというだけでなく、歴史学・古文書学等の他の分野にも大いに寄与できるものであると考えている。

## 2) 文書料紙原本調査

本研究の最も中心となる作業は、現在に伝来した古代中世の文書の料紙原本に直接に当たる調査である。まず作業は、文書に用いられた紙の種類を識別するためには、どのようなデータを集めたらよいかを検討するところから始った。すなわち、調査項目の検討である。調査項目は、大きくまとめると、文書のデータと料紙のデータとに分けられる。文書のデータは、特定の料紙がどのような文書に、さらにはその文書のどのような部分に使用されていたかを考察する上で重要なものである。その項目を列記すると次のようである。

- 1. 文書名
- 2. 文書の日付(案文等は、書写年代を書き加える)
- 3. 文書の属している史料名(文書群名)および史料中の番号
- 4. 史料の現所蔵者名
- 5. 差出書
- 6. 充所

7. 端裏書

8. 文書の様式分類（下文様か、書札様か）

9. 文書の形状（縦紙・折紙・切紙・続紙等の別）

10. （書札様ならば）封式の種類（切懸封・捻封・折封等の別）

11. （切懸封ならば）封紐の長さ（文書を封じた時の実長・現存部分の長さ）

12. （書札様ならば）部分名（本紙・裏紙・礼紙・懸紙等の別）

13. （下文様ならば）位置（続紙の第何紙目か）

1の文書名は、文書の種類と紙の種類との相関関係を見ようとするもの、8の様式分類も、文書の種類を大きく下文様と書札様に分けた場合に、それぞれの様式の文書と料紙の種類との間にどのような相関関係が見られるかを意図したものである。2の日付は、料紙の生産年代を推し量る料とするものである。5の差出書と6の充所は、前者の身分の高下や両者の身分的格差と料紙の品質との相関を見んとするものである。9の形状と10の封式は、形状および封式による料紙の選択が行われるか否かを考えようとしたものである。

つぎに、調査の主眼である料紙のデータであるが、これは主観的なデータと客観的なデータの両方を採ろうと言うことになった。主観的・客観的の区別はなかなか難しい問題ではあるが、器械・器具を用いて計測できるデータを客観データとしておこう。それは、つぎに列挙するようなものである。

1. 簀目の本数（1寸当たりの本数）

2. 糸目の間隔

3. 料紙の厚さ

4. 料紙の縦横の寸法

5. 料紙の重さ

簀目は、紙をすく簀のヒゴの跡が紙面に付いたもので、これによりその紙を製作した簀のヒゴの太さがわかる。簀目が目立つかどうか、それが太いか細いかは、紙の種類の見分けの重要な目安である可能性も否定できない。糸目も、簀のヒゴを編んだ糸の跡が紙面に残ったものである。それが太いか細いか、その間隔が広い狭いかも紙の品質に影響与えるものであろう。糸目の間隔は、幾つかの間隔の平均値であり、単位はcmで小数点以下第1位まで計測した。紙の厚さ・縦横寸法・重さは料紙の外見的な大小を表すものであり、当然紙の種類や品質を規定している大きな要因である。厚さはマイクロ・メートルでmm単位で小数点以下第2位まで計量した。縦横寸法はcm単位で小数点以下第1位まで、重さはg単位で小数点以下第2位までの計測である。

つぎに、料紙のデータのうち主観的判断を通して採取しなければならない項目とは、次のようなものである。

1. 料紙の材質（楮紙か、斐紙か。楮紙ならば檀紙・引合・杉原・奉書紙等の別、斐紙ならば鳥の子かその他かの別）



2. 再生紙か否か（宿紙等）
3. 染紙か否か（染紙ならばその色は何か）
4. 打紙か否か
5. 紙質の外見的判断（大小・厚薄・堅柔・品質）
6. 紙面の色（光沢の有無も）
7. 紙面に漉皺があるか否か
8. 使用されている墨の種類（松煙・油煙の別）・乗り・滲み
9. 紙の繊維の外見（太さ・長さ・密度）
10. 漉上げの痕跡（簀目・糸目・板目・刷毛目・紗目の有無、目立つか否か、有るとすれば表にか裏にか）
11. 漉上げの精粗（漉斑・繊維溜・異物混入の有無および程度）
12. 破損状況

1の材質は、ずばり紙の種類に関する判断である。本研究の最終的目的もこれを見極めるところにあるのであるが、取り敢えずは、調査員が主観的にその料紙をどういう種類の紙と考えているかということ、が表示されることになる。調査研究の最終的な判断とどれだけ異なるか否かかによって、これまでの我々研究者の経験的判断がどれだけ頼れるものだったか結論が出されるであろう。材質とは紙の主原材料の楮とか雁皮とかを指すものであるが、ここでは取り敢えず、同じ材料でも抄造技術の相違による檀紙・杉原等の区別も材質の相違として扱っておく。2から4までの再生紙・染紙・打紙は、紙の2次的加工があるかどうかみるもので、加工の有無の判断は衆目の一致するところであるから、これは客観的データに数えてもよいであろう。1の材質と同様、これらの2次的加工の施された料紙が、どのような文書に利用される傾向があるのかを見ようとするものである。

5の外見的判断は、紙の種類・品質に対する主観的判断を採るもので、大きさ・厚さについては、器械による数量的計測をしているのであるから不必要かもしれないが、これも主観的判断の確かさあるいは不確かさの客観的データとなるであろう。堅さは、これを計る基準を持ち合せていないこと、現存の紙の堅さが製造当時の堅さなのか現存状況におけるそれなのか判断が難しいこと、等の問題がある。品質は、あらゆる要素を考えた総合判断であるから、堅さと同様主観的データに他ならない。6から8までの紙面の色・光沢・漉皺・墨については、紙面観察から紙の品質を見分けることができるかどうか試みたものである。松煙墨・油煙墨の別の判断も、今のところまだ判定基準の検討が要請されている段階である。これについては、別途経年変化の問題も含め、器械開発による判定を検討している。墨の乗り・滲みも、判断できるもののその比較する基準が難しい。紙面の色となると、単純な色の比較ではなく複雑な色調の判断だけに表現する術がない。観察条件（環境の明暗）によって微妙に変化することもあり、客観データ足りえない。光沢も反射して照り輝く（表面が平滑なのだろう）のと、紙自体が発光しているかのような風合い（光の透

過や乱反射によるものか)をもつものとは、光沢の質が異なると言わざるをえない。いずれにせよ、主観的データに他ならない。

9の繊維の外見は、肉眼ないし拡大鏡による観察が必要であり、これを客観データとするには、精度の高い顕微鏡による観察に委ねるしかない。11の漉上げの精粗も、紙の繊維状態からその品質を判断しようとするものである。10の漉上げの痕跡は、これらをその料紙の抄造過程を考える材料としようとするものである。

簀目と糸目とは、簀と接した面すなわち紙の原料の繊維が入った舟から漉上げられたときの下面に痕跡が残る。これを板に張り付けて乾燥さすが、簀目・糸目と同じ面が板と接する場合と、反対に簀目・糸目のある面の裏が板に接する場合の両様がある。前者の場合は、板の木目の痕跡が簀目と同じ面に重なり、後者では木目は簀目の反対にくる。紙を板に張り付けて干すとき、紙を刷毛で撫でつけるがその際刷毛の跡が板目の裏面に残る。板目の方は平滑面に押し付けられて滑らかであるから紙の表となり、刷毛目の方が裏となる。簀目・糸目については、表となる場合と裏となる場合の両方があるというわけである。統計的にいうと、簀目が表となることが多いようである。紗目は、簀に布を敷いて紙を漉上げたときにつく痕跡で、斐紙や宿紙の製造のときによく用いられる。したがって、紗目の残る面は簀目と同じ面ということになる。しかし、紗目の残る場合は簀目は付きにくいことは言うまでもない。こうした簀目などが紙字面の表裏のどちらに付いているかは、ある程度経験すれば見極めることができる。この点ではこれらは慎重に進めれば客観データとして使えるであろう。しかし、その痕跡が目立つ程度となると、もう少し厳密な基準が必要となろう。

以上の調査項目を1紙にまとめ調査票を作成したが、その様式は次ページの表1に示すとおりである。

調査項目の決定とともに考えなくてはならない重要なことは、どのような文書群を調査対象に選ぶかということである。古代と中世の文書全体、しかも国家最高身分から庶民に至るまでの諸階層が発給する文書全体を見渡さなければならないのは当然であろう。また、文書を記録として保管管理する組織体も、国家・公家・武家・寺社等の中央の機関・組織あるいは諸々の地方の機関・組織にまでいろいろあるが、これらの機関・組織に伝来した文書群を見通す視野も持たなければならない。しかし、何よりもこれらの文書群が本研究の研究対象として調査できうる条件にあるかどうかの問題である。文書の大半が表具や卷子あるいは裏打をされていると、文書料紙の状態が観測しにくいし、厚さや重さも計測できない。表具の際、料紙の天地・端奥を切断してるとなると、縦横の寸法さえデータとはならない。裏打などののちに文書に加工が加えられていない、作成当初の姿を止めている文書を多く含む文書群を選ばなければならない。

このような観点から、我々は以下の文書を選定し、調査計画した。まず、奈良時代の文書は正倉院文書以外ありえない。平安・鎌倉時代の寺院文書として東大寺文書、鎌倉・南

[illegible]

北朝・室町時代の寺院文書として東寺文書、鎌倉・南北朝・室町時代の公家文書として久我家文書、戦国時代の武家文書・地方文書として上杉家文書を主たる調査対象とすることにした。そして、これを補う文書群として、社家文書では八坂神社文書・離宮八幡宮文書、公家文書では九条家文書、武家文書では細川家文書・留守家文書、地方寺社文書では太宰府天満宮文書・鰐淵寺文書・北島国造家文書・善通寺文書などを候補として選んだ。しかし、このうち、正倉院文書はまだ一般的な調査が認められる段階ではないので、結局奈良時代の文書料紙の調査は諦めざるをえなかった。しかし、前述のように宮内庁正倉院事務所の御好意をえて本研究の研究者の中に同所の研究員を加えていただき、その研究成果の一部を反映させていただくこととした。結果として、本調査の主たる調査対象の文書群は、東大寺文書・東寺文書・久我家文書・上杉家文書ということになる。補助的に選定した文書については、機会の許す範囲で調査を行ったが、当初想定したような状態にない文書が多く、残念ながら不完全なデータしかえられなかった。そのため、急遽調査機会のえられた武家文書の大友家文書、地方社家文書の阿蘇神社文書を補完の文書として加え、所期の目標に添うよう計画の手直しを行った。

この料紙原本調査では、以上の文書群を対象に当初は1万件を超えるデータを採取する計画であった。ところが、いざ実際に調査に着手してみると、上述の調査票1枚当たりの調査項目が非常に多く、且つ1項目当たりの調査に予想以上の時間がかかることが判明した。例えば後者の例では、簀目・糸目・板目・刷毛目・紗目などの項目においてこれらの紙面上に残る痕跡を探すためだけでも、料紙を透かしたり、光の当て方を変えたり、紙面を凝視しなければならず、そのため15～30分もの時間を要する具合であった。また、料紙の厚さを計測するのも、時間の要する項目の1つである。紙はどんなに良質であってもその厚さが均一ということはなく、計測点によってかなりの格差が見られるものである。そのため本調査では計測点を20箇所として、その平均でもって厚さを算出することとした。手動のマイクロ・メーターで文書を痛めないように計測するのは予想外に時間を消費するものであった。このようなことから、本調査は早い段階から調査件数を縮小するか、それとも調査項目を減少するかを選択が迫られることとなった。結局、我々としては1件当たりの調査内容を充実させることとし、前者の方を選ぶことにした。したがって、実際に採取できたデータ数は次の通りとなった。

平成4年度	1, 412件
平成5年度	2, 015件
平成6年度	728件
計	4, 155件

ただし、5・6年度の分のうちには4・5年度の調査の結果の反省の上になって再調査した分（1,322件）も含まれる。結局、実際3ヵ年採取できたデータ数は、これを差し引いた2,833件ということになる。

### 3) 文書料紙の光学的調査

古代中世の人々は、紙を見たり触ったりしただけでその種類を見分けることができたと思われるが、それは大きさ・厚さ・色合い・堅さなどの感触上、原材料や填料その他製造過程でついた簀目の痕跡などの視覚上からの判断によるものであろう。我々が現存の遺品について料紙の種類を見分けるためには、古代中世人の感覚的判断を自分たちのものにしなければならない。それは大変難しいことであるが、方法的に可能であることは先に述べた。この方法を可能にする1つの条件として、このように見える紙は、どのような原材料や填料をもって製造されているのか、あるいはどのような道具でどのような技法をもって漉上げられたのか、を知っておく必要がある。現存の遺品について、紙の繊維の種類（原材料の種類）・長さ・太さ・叩解度・均一性・流れの方向・絡まり具合・密度とか、填料の種類やその量とかが計量的に正確に測定できるならば、その結果と我々の感覚とを突き合わせることによって、このように見える紙はデータ的にこういう紙だということが了解されるであろう。

こうした紙の原材料や填料のデータを、光学器械を利用してできうるかどうか、試験してみようというのが本調査である。この調査を主として担当したのは東京国立文化財研究所のメンバーであるが、まず同所にはこの試験調査の設備として、文書の紙片採取することなく全紙をそのまま台の載せて覗ける、精密な顕微鏡を設置した。そして、前記の文書料紙原本調査において特徴的と感じられた幾つかのパターンの文書料紙を顕微鏡で覗き、検討を加えた。文書料紙に対する感覚のパターン化がもう一つ具体化できなかったこともあり十分な成果を挙げたとは言い難いが、その糸口は掴めたと思っている。その成果の一部は、次章の増田勝彦の論考に示されている。先述したように、この調査は別の形で継続する予定であるが、この調査も続けて課題として行きたい。

### 4) 文書料紙の化学的分析

この分析調査の趣旨は光学的調査と同じである。特に化学的分析が必要とされるのは、紙の繊維（原材料）の種類あるいは填料の種類や量についてであり、これらは光学的調査だけでは判断が難しいからである。しかし、化学的分析というのは、繊維片に試薬を加えその反応を見て原材料や成分を判断するものであり、必ずしも非破壊検査を行える現状にはない。そのための紙片の採取については、文書の保存の上から当然のこととして十分に慎重を期し、極力最小限度の範囲に限定さなければならない。本調査では、破損文書の修理に当たって、旧裏打紙に付着した本紙の繊維片を中心に、当該文書の一部であることが確実であるがどの部分の紙片とも確定し難くいわば浮いてしまった紙片で、かつ径2・3

ミリメートル以下の微片に限った。この3カ年に化学試験サンプルとして採取できた紙片は、計 200点余りである。

これらの紙片を化学的試験に供するわけであるが、現在、紙についてこのような化学的分析試験ができる機関は高知県立紙業試験場しかない。したがって、当初、当該試験場に依頼し、これらのサンプル繊維片の化学分析をする予定であった。ところが、前記の光学的調査と同様に、基になる文書料紙に対する我々の感覚のパターン化ができていず、また、この試験場においても古代中世の古文書を対象とした試験は、ほとんど経験がなかった。そのため、本研究の研究メンバーで当該試験場の見学会を催し、文書料紙の化学分析でどのようなことが解明できるか、可能性を検討してみた。また、当試験場の研究員を文書料紙原本調査の現場に招き、実際に現物の古文書料紙の様々な種類を目で確かめてもらった。そのうえで、10数点の上記サンプル紙片について試験的に化学分析を試みてもらった。とくに、米粉などの填料が含まれているのではと思われた紙片については、かなりの確度でそれが確かめられた。この分析調査の試験的結果も上記の光学的調査と合せ、文書料紙に対する我々の感覚のパターン化を確実にしたうえで、今後の継続調査に活かしていきたい。

## 5) 文献資料調査

この調査は、古代中世ではどのような紙の種類があつて、どのような名称であり、それがどのような変遷してきたか、また、古代中世の人々がどのようにしてそれらの紙の種類を識別していたのか、さらにそれらの紙がどのような文書に利用されてきたのか、当時の文献史料に当たって確かめてみようとするものである。加えて、このような和紙や文書料紙の性質・名称・製造法やその歴史についての研究書・刊行史料の収集および研究検討を行った。

まず、古文献の調査は、奈良国立文化財研究所と富山大学においてアルバイトを使って行った。前者においては、兵範記・中右記・長秋記・台記・同別記・台記抄・台記補遺・小右記・山槐記・公衡公記・同別記・人車記要目・貞信公記・九暦抄・九条殿記・九暦記・九暦逸文・字槐記抄・御堂関白記等の平安時代の日記を主とした文献について史料の探索を行い、2,770件の紙に関するデータを採取し、コンピュータに入力しおえた。後者においては、石山本願寺日記中の証如上人書札案・顕如上人文案・証如上人書札礼等の文書料紙に関するデータを2,770件を採取し、これもコンピュータに入力し終えた。さらに、関義城氏の編纂された「和漢紙文献類聚」古代・中世編のうち「一．日本の文献」の部分の全文をコンピュータに入力した。このデータも2,783件にのぼる。

つぎに、和紙に関する研究書・刊行史料等の収集は主として富山大学で行った。購入できるものは購入し、できないものは複写した。さらに、財団法人製紙記念館が昭和27年に作成した他和紙に関する文献の目録（490件）をコンピュータに入力した。今後、これに

独自に調査した文献を追加していきたいと思っている。

これらのコンピュータ入力データは、文書料紙原本調査のコンピュータ入力データとともに研究メンバーにコピーを配付し、それぞれの研究の参考とした。

## 6) データのコンピュータ入力

上述のように、文書料紙原本調査や文献資料調査で集めたデータは、極力コンピュータに入力することとした。後の検索を容易にするためだけではなく、これを分析検討するためである。本調査で、作成したデータ・ベースとその件数をまとめると次の通りである。

1. 文書料紙原本調査データ	1,737件
2. 料紙に関する日記記事データ	2,770件
3. 「和漢紙文献類聚」古代・中世編データ	2,783件
4. 「石山本願寺日記」所収文書料紙データ	634件
5. 和紙に関する文献目録データ	489件
6. 和年号・西暦年号換算データ	1,367件

いずれのデータ・ベースも、ソフトは管理工学研究所の桐（ Ver.4またはVer.5 ）を使用した。また、和年号・西暦年号換算データを除くほかは、表形式および帳票形式の両方で作成している。和年号・西暦年号換算データは、1から5までのデータの和年号・西暦年号換算のために補助的に作成したものである。大宝元年から平成7年までの年号換算ができる。

このうち、文書料紙原本調査データと「和漢紙文献類聚」古代・中世編データとの、それぞれの表形式の項目定義とこの定義によって入力した帳票形式の表示例を示すと、次ページ以下の表2から表5までのとおりである。表2は、文書料紙原本調査データの表形式の項目定義であり、104項目からなっている。調査票には設けなかった厚差最大値・厚差標準偏差値・封比率・寸法比率1・寸法比率2・面密度・体密度等の項目が新たに加えられている。これらは、調査票の数値項目から計算によって求められる新たな数値項目である。その他、短縮史料名・史料番号2・史料番号3・史料番号3-2・時代数値・数値時代・判断（厚さ）・判断（寸法）・判断（重さ）等は、このデータを操作する上で必要にかられて追加した項目である。値条件の欄において、集合となっている項目は、括弧内の選択肢から番号によって入力項目が選べる仕組になっている。11番の西暦の項目は表引きとなっているが、これは9番の年号欄に和年号を入力しておけば、和年号・西暦換算表のデータから自動的に西暦年号の数値を書込む仕組になるのである。項目計算式の欄において、計算式が書込まれている厚平（平均）・厚差最大値・厚差標準偏差値・寸法比率1・寸法比率2・面積・面密度・体密度等の項目はそれぞれ厚さ1～20のデータおよび縦横の寸法・重さ等の数値によって自動的に計算して数値を書込む仕組である。この表形式の項

表2 「文書料紙原本調査データ」コンピュータ入力項目定義表

項目名		値条件	項目計算式
1	調査ID	数値	-1
2	所蔵者	文字列 集合 {1: 京都府, 2: 東大寺, 3: 米沢市, 4: 国学院, 5: 鈴御花, 6: }	
3	史料名	文字列 集合 {1: 東寺百合文書, 2: 東大寺文書, 3: 上杉家文書, 4: 久我家文書, 5: 大友家文書, 6: }	
4	短縮史料名	文字列	
5	史料番号	文字列	-1
6	史料番号2	文字列	-1
7	史料番号3	文字列	-1
8	史料番号3-2	数値	-1
9	年号	文字列	
10	月日	文字列	
11	西暦	数値 表引き { [年号], "B: ¥NENGOU.TBL", [和年号], [西暦数値] }	-1
12	書写年代	文字列 集合 {1: 平安, 2: 鎌倉, 3: 南北朝, 4: 室町, 5: 織豊期, 6: 江戸, 7: }	-1
13	時代数値	数値	
14	(前中後)	文字列 集合 {1: 前, 2: 中, 3: 後, 4: }	-1
15	数値時代	数値	
16	文書名	文字列	
17	正・案	文字列 集合 {1: 正文, 2: 案文, 3: 土代, 4: 写 }	
18	端裏	文字列 集合 {1: 無, 2: 有 }	
19	端裏書	文字列	
20	充所	文字列	
21	差出	文字列	
22	様式	文字列 集合 {1: 下文様, 2: 書礼様, 3: その他, 4: }	
23	形状	文字列 集合 {1: 罫紙, 2: 折紙, 3: 堅切紙, 4: 横切紙, 5: 続紙, 6: }	
24	封式	文字列 集合 {1: 切掛封, 2: 捻封, 3: 折封, 4: その他, 5: 無, 6: }	
25	封紐	文字列 集合 {1: 無, 2: 有 }	
26	残存紐長	数値	-1
27	実長紐長	数値	-1
28	部分	文字列 集合 {1: 本紙, 2: 裏紙, 3: 礼紙, 4: 懸紙, 5: }	
29	位置	文字列 集合 {1: 本紙 1, 2: 本紙 2, 3: 続紙 1, 4: 続紙 2, 5: 続紙 3, 6: }	
30	欠損	文字列 集合 {1: 無, 2: 有 }	
31	欠損位置	文字列 集合 {1: 袖, 2: 奥, 3: 天, 4: 地, 5: 袖・奥・天・地, 6: }	
32	材質1	文字列 集合 {1: 楮紙, 2: 楮紙 (檀紙), 3: 楮紙 (引合), 4: 楮紙 (杉原), 5: 楮紙 (奉書), 6: 楮紙 (大高), 7: 楮紙 (小高), 8: 楮紙 (その他), 9: 斐紙 (鳥の子), 10: 斐紙 (その他), 11: }	
33	材質2	文字列 {1: 漉返, 2: 宿紙, 3: 漉返・宿紙 }	
34	染色	文字列 集合 {1: 無, 2: }	
35	外大 (大きさ)	文字列 集合 {1: 大, 2: 中, 3: 小 }	



36	外厚 (厚さ)	文字列 集合{1:厚, 2:中, 3:薄}	
37	外堅 (堅さ)	文字列 集合{1:堅, 2:柔}	
38	外品 (品質)	文字列 集合{1:上, 2:中, 3:下}	
39	地色	文字列 集合{1:白, 2:黄, 3:白黄, 4:淡黄, 5:褐色, 6:淡褐, 7:}	
40	光沢	文字列 集合{1:無, 2:有, 3:}	
41	漣露	文字列 集合{1:無, 2:有 (縦), 3:有 (横), 4:有 (縦横), 5:有 (斜), 6:}	
42	化粧断	文字列 集合{1:漣上のまま, 2:天地・袖・裏, 3:有, 4:}	
43	墨染	文字列 集合{1:良, 2:普, 3:悪}	
44	墨染み	文字列 集合{1:無, 2:有}	
45	墨種	文字列 集合{1:油煙, 2:松煙}	
46	打紙	文字列 集合{1:無, 2:有, 3:}	
47	太繊維 (太さ)	文字列 集合{1:太, 2:中, 3:細}	
48	密繊維 (密度)	文字列 集合{1:密, 2:普通, 3:粗}	
49	長繊維 (毛足)	文字列 集合{1:長, 2:普通, 3:短}	
50	太實目 (太さ)	文字列 集合{1:太, 2:細}	
51	視實目 (目立) 1	文字列 集合{1:顕著, 2:僅か, 3:不詳, 4:}	
52	視實目 (目立) 2	文字列 集合{1:透視, 2:微か, 3:不詳, 4:}	
53	数實目 (本数)	数値	
54	實表裏	文字列 {1:表, 2:裏, 3:}	
55	太糸目 (太さ)	文字列 集合{1:太, 2:細}	
56	視糸目 (目立) 1	文字列 集合{1:顕著, 2:僅か, 3:不詳, 4:}	
57	視糸目 (目立) 2	文字列 集合{1:透視, 2:微か, 3:不詳, 4:}	
58	巾糸目 (巾)	数値	
59	糸表裏	文字列 {1:表, 2:裏, 3:}	
60	板目	文字列 集合{1:無, 2:有 (表・顕), 3:有 (表・微), 4:有 (裏・顕), 5:有 (裏・微), 6:}	
61	刷目	文字列 集合{1:無, 2:有 (表・顕), 3:有 (表・微), 4:有 (裏・顕), 5:有 (裏・微), 6:}	
62	紗目	文字列 集合{1:無, 2:有 (表・顕), 3:有 (表・微), 4:有 (裏・顕), 5:有 (裏・微), 6:}	
63	漣斑	文字列 集合{1:無, 2:有 (顕), 3:有 (普通), 4:有 (微), 5:}	
64	縫維溜	文字列 集合{1:無, 2:有, 3:}	
65	異物混入	文字列 集合{1:無, 2:樹皮片, 3:裏, 4:樹皮片・裏, 5:}	
66	厚 1 (袖 1)	数値	-1
67	厚 2 (袖 2)	数値	-1
68	厚 3 (袖 3)	数値	-1
69	厚 4 (袖 4)	数値	-1
70	厚 5 (袖 5)	数値	-1

項目名 : 予選 : 値条件 : 項目計算式 : 単位:

71	厚 6 (地 1)	数値				-1
72	厚 7 (地 2)	数値				-1
73	厚 8 (地 3)	数値				-1
74	厚 9 (地 4)	数値				-1
75	厚 10 (地 5)	数値				-1
76	厚 11 (奥 1)	数値				-1
77	厚 12 (奥 2)	数値				-1
78	厚 13 (奥 3)	数値				-1
79	厚 14 (奥 4)	数値				-1
80	厚 15 (奥 5)	数値				-1
81	厚 16 (天 1)	数値				-1
82	厚 17 (天 2)	数値				-1
83	厚 18 (天 3)	数値				-1
84	厚 19 (天 4)	数値				-1
85	厚 20 (天 5)	数値				-1
86	厚平 (平均)	数値				-1
87	判断 (厚さ)	文字列				1
88	厚差最大値	数値				
89	厚差標準偏差値	数値				
90	封比率	数値				-1
91	縦寸法	数値				-1
92	横寸法	数値				-1
93	寸法比率 1	数値				-1
94	寸法比率 2	数値				2
95	判断 (寸法)	文字列				2
96	面積	数値				1
97	重さ	数値				
98	判断 (重さ)	文字列				
99	面密度 (0.1㎡当)	数値				-1
100	体密度 (0.01立方cm当)	数値				-1
101	所見	文字列				
102	産地	文字列				
103	保存状況	文字列				
104	撮影	文字列				

集合{1:大破,2:中破,3:小破,4:良好,5:修理済,6:}

表3 「文書料紙原本調査データ」帳票形式プリント・アウト例

調書ID	304 所蔵者 京都府		史料名 東寺百合文書		こ-104- -		
日付	年号	月日	2月 5日	西暦	9999902005		
	書写年代	鎌倉 時代	後 期				
文書名	伏見上皇院宣					正文	
端裏	無						
充所	宮内卿法印御房						
差出	俊光						
様式	書札様						
形状	竪紙						
封式	折封						
封紐	無	長さ	(残存)	cm	(実長)	cm 寸法比率 %	
部分	本紙	位置	本紙 1				
欠損	無	位置					
材質	楮紙(杉原)						
染色	無						
外見	(大きさ)	大	(厚さ)	中			
	(堅さ)	柔	(品質)	中			
紙面	(地色)	白黄	(光沢)	無			
	(漉皺)	無	(化粧断)	天・地・袖・奥			
	(墨乗)	普	(墨滲み)	無	(墨種)	油煙	
	(打紙)	無					
繊維	(太さ)	中	(密度)	普通	(毛足)	普通	
簀目	(太さ)		(目立)	僅か /	(一寸当)	17 本 ( )	
糸目	(太さ)	細	(目立)	/ 微か	(糸目中)	2.2 cm ( )	
板目	有(表・微)						
刷目	有(裏・微)						
紗目	無						
精粗	(漉斑)	無	(繊維溜)	中 普通、小 普通			
	(異物混入)	樹皮片					
厚さ (1/100mm)	袖	(1)	25	(2)	16	(3)	17
		(4)	24	(5)	22		
	地	(6)	34	(7)	24	(8)	26
		(9)	22	(10)	22		
	奥	(11)	20	(12)	17	(13)	17
		(14)	15	(15)	20		
	天	(16)	19	(17)	18	(18)	18
		(19)	19	(20)	20		
	平均	20.75	判断				
	厚差	(最大値)	19	(偏差値)	4.29		
寸法	(縦)	340 mm	(横)	540 mm	判断		
	(比率)	63 %	1.59 倍				
面積	1836 cm <sup>2</sup>						
重さ	136 dg	判断					
密度	(面積)	74 g/m <sup>2</sup>	(体積)	36 10kg/立方m			
所見	双眼あり。強杉原カ。						
産地							
保存状況	要撮影						

表4 「和漢紙文献類聚」古代・中世編データ」コンピュータ入力項目定義表

	項目名	データ型	値条件
1	史料ID	数値	範囲 {>0,<1000000}
2	史料名	文字列	
3	巻冊	文字列	
4	刊本	文字列	
5	頁	数値	
6	和年号	文字列	
7	判断	数値	
8	西暦	数値	表引き {[和年号],"B:¥NENGOU",,[和年号],[西暦数列]}
9	月	数値	
10	日	数値	
11	ワ	文字列	
12	キ	文字列	
13	史料備考	文字列	

表5 「和漢紙文献類聚」古代・中世編データ」帳票形式プリント・アウト例

[ 和 紙 関 係 史 料 ]									
史料ID	1599								
史料名	園太曆								
巻・冊									
刊 本							頁	130	
和 年 号	延文 2年 3月26日		判断	0	西曆	13570	月日	3026	
KW-1	懐紙寸法 讃岐高檀紙								
KW-2									
史料本文	招引実遠朝臣令清書百首愚詠、讃岐高檀紙十五枚切続〈高一尺二寸〉令書之、先日相談宗匠禪門〈為定入道〉之處、一尺二寸八分為寸法之由返答者、貞和予一尺二寸切之是先公懐紙〈元応〉正本見及有之、仍如此、今度非可相違、仍彼寸法用之歟、又未被行中殿宴之間不可書応製臣下〈下恐上誤〉字、如此之時大臣書姓否兩説也、大略書之也、而八雲抄大臣不載姓之由所見也、去正中二年之始御会、先公為前左大臣不令書給、且談合後照念院博陸被定了、彼時沙汰之次第在文書也、又春日同詠四字、人々大略之、但又雖晴御会已後、書応製臣上之時或略之、且宿老人大略不書之、先公元応御百首為当職、雖被載応製臣上不令書給、予貞和不書之、仍又今度不書之也（下略）								

目定義は、一部を除いて殆ど帳票形式の項目定義にそのまま使用している。その帳票形式の項目定義に基づいて1件のデータを打出してみたのが表3である。

同じく、表4は「和漢紙文献類聚」古代・中世編データの表形式の項目定義である。項目数も13個で単純である。値条件でも、西暦の項目が表引きになっているだけである。帳票形式の項目定義は、この表形式の項目定義と全く同じであって、1件データについて帳票形式で打出したものが表5である。

## 7) 研究会・検討会の開催

本研究は、方法的に新しい試みであったため、試行錯誤の連続であった。そのため、準備段階から全体的な計画や調査項目等の検討について打合せを行い、また現存文書料紙原本調査の度毎に調査結果の解釈や調査方法などについて研究会・見学会をもち議論を重ねてきた。さらに、本報告書をまとめるに当たっても特別に打合せの会合をもった。その回数は、第I章の3. 研究会・検討会の開催の項で表に示したように前後16回を数えた。このほかにも、非公式な打合せは他の要件の際にも行われているが、煩わしいので述べない。

## 8) 調査研究の成果

以上の経過に述べたように、3カ年に亘りこれらの調査・データの整理・コンピュータ入力・研究会・検討会などを行ってきたが、その成果は前述のようにけして満足できるものとは言えないが、研究をこれらの方法で継続していけば十分な成果が見込みうる見通しがたつたと思われる。今回は、中間報告的になってしまうが、その研究概要は、次の第2部の「研究報告編」として、各研究分担者の研究報告を載せる。また、調査結果の主なデータは、第3部の「データ編」として掲載した。活用いただければ、幸甚である。